

法華經二の巻に云はく「其の人<sup>みようじゅう</sup>命終<sup>あびごく</sup>して阿鼻獄に入らん」云云。阿鼻地獄と申すは天竺の言、唐土日本には無間と申す。無間はひまなしとかけり。一百三十六の地獄の中に一百三十五はひま候。十二時の中にあつけれども、又すゞしき事もあり。たへがたけれども、又ゆるくなる時もあり。此の無間地獄と申すは十二時に一時かた時も大苦ならざる事はなし。故に無間地獄と申す。此の地獄は此の我等が居て候大地の底、二万由旬<sup>じゅうん</sup>をすぎて最下の処なり。此世間の法にも、かるき物は上に、重き物は下にあり。大地の上には水あり、地よりも水かるし。水の上には火あり、水よりも火かるし。火の上には風あり、火よりも風かるし。風の上には空あり、風よりも空かるし。人をも此の四大を以て造れり。悪人は風と火と先づ去り、地と水と留まる。故に人死して後、重きは地獄へ墮つる相なり。善人は地と水と先づ去り、重き物は去りぬ。軽き風と火と留まる故に軽し。人天へ生まるゝ相なり。地獄の相重きが中の重きは無間地獄の相なり。彼の無間地獄は縦横二万由旬なり。八方は八万由旬なり。彼の地獄に墮つる人々は一人の身大いにして八万由旬なり。多人も又此くの如し。身のやはらかなる事綿の如し。火のこわき事は大風の焼亡の如し、鉄の火の如し。詮を取って申さば、我が身より火の出づる事十三あり。二の火あり、足より出でて頂をとる。又二の火あり、頂より出でて足をとほる。又二の火あり。背より入りて胸に出づ。又二の火あり、胸より入りて背へ出づ。又二の火あり、左の脇より入りて右の脇へ出づ。又二の火あり、右の脇より入りて左の脇へ出づ。亦一の火あり、首より下に向かひて雲の山を巻くが如くして下る。此の地獄の罪人の身は枯れたる草を焼くが如し。東西南北に走れども逃げ去る所なし。他の苦は且く之を置く。大火の一苦なり。此の大地獄の大苦を仏委しく説き給ふならば、我等衆生聞きて皆死すべし。故に仏委しくは説き給ふ事なしと見えて候。

今日本国の四十五億八万九千六百五十八人の人々は皆此の地獄へ墮ちさせ給ふべし。されども一人として墮つべしとはおぼさず。例せば此の弘安四年五月以前には、日本の上下万人一人も蒙古の責めにあふべしともおぼさゞりしを、日本国に只日蓮一人計り、かゝる事此の国に出来すべしとしる。其の時日本国四十五億八万九千六百五十八人の一切衆生一人もなく他国に責められさせ給ひて、其の大苦は、譬へばほうろくと申す釜に水を入れて、ざつこと申す小魚をあまた入れて、枯れたるしば木をたかむが如くなるべしと申せばあらおそろし、いまいまし、打ちはれ、所を追へ、流せ、殺せ、信ぜん人々

をば田はたをとれ、財を奪へ、所領をめせと申せしかども、此の五月よりは蒙古の責めに値ひてあきれ迷ふ程に、さもやと思ふ人々もあるやらん。にがにがしうしてせめたくはなけれども、有る事なればあたりたり、あたりたり、日蓮が申せし事はあたりたり。ばけ物のもの申す様にこそ候めれ。

去ぬる承久の合戦に、隱岐の法皇の御前にして京の二位殿などと申せし何もしらぬ女房等の集まりて、王を勧め奉り、戦を起こして義時に責められ、あはて給ひしが如し。今御覽ぜよ。法華経誹謗の科と云ひ、日蓮をいやしみし罰と申し、経と仏と僧との三宝誹謗の大科によて、現生には此の国に修羅道に移し、後生には無間地獄へ行き給ふべし。此又偏に弘法・慈覚・智証等の三大師の法華経誹謗の科と、達磨・善導・律僧等の一乘誹謗の科と、此等の人々を結構せさせ給ふ国主の科と、国を思ひ生処を忍びて兼ねて勘へ告げ示すを用ひずして還つて怨をなす大科、先例を思へば、呉王夫差の、伍子胥が諫めを用ひずして越王勾踐にほろぼされ、殷の紂王が、比干が言をあなづりて周の武王に責められしが如し。

而るに光日尼御前はいかなる宿習にて法華経をば御信用ありけるぞ。又故弥四郎殿が信じて候ひしかば子の勧めか。此の功德空しからざれば、子と俱に靈山浄土へ参り合はせ給はん事、疑ひなかるべし。烏竜と云ひし者は法華経を謗じて地獄に墮ちたりしかども、其の子に遺竜と云ひし者、法華経を書きて供養せしかば、親、仏に成りぬ。又妙莊嚴王は悪王なりしかども、御子の浄蔵・浄眼に導かれて、沙羅樹王仏と成らせ給ふ。其の故は子の肉は母の肉、母の骨は子の骨なり。松栄ゆれば柏悦ぶ、芝かるれば蘭なく。無情の草木すら友の喜び友の歎き一つなり。何に況んや親と子との契り、胎内に宿して九月を経て生み落とし、数年まで養ひき。彼になはれ、彼にとぶらはれんと思ひしに彼をとぶらふうらめしさ、後如何があらんと思ふこゝろぐるしさ。いかにせん、いかにせん。子を思ふ金鳥は火の中に入りき。子を思ひし貧女は恒河に沈みき。彼の金鳥は今の弥勒菩薩なり。彼の河に沈みし女人は大梵天王と生まれ給ふ。何に況んや今の光日上人は子を思ふあまりに法華経の行者と成り給ふ。母と子と俱に靈山浄土へ参り給ふべし。其の時の御対面いかにうれしかるべき、いかにうれしかるべき。

八月八日

光日上人御返事